

授業で使える当館所蔵地図

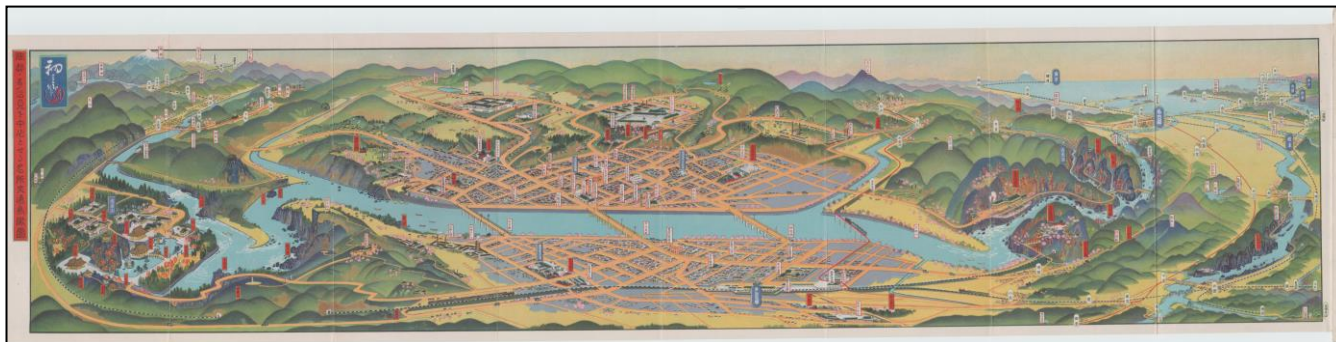
No. 52 『陶都多治見を中心とする名所交通鳥瞰図』

作成年：1929（昭和4）年

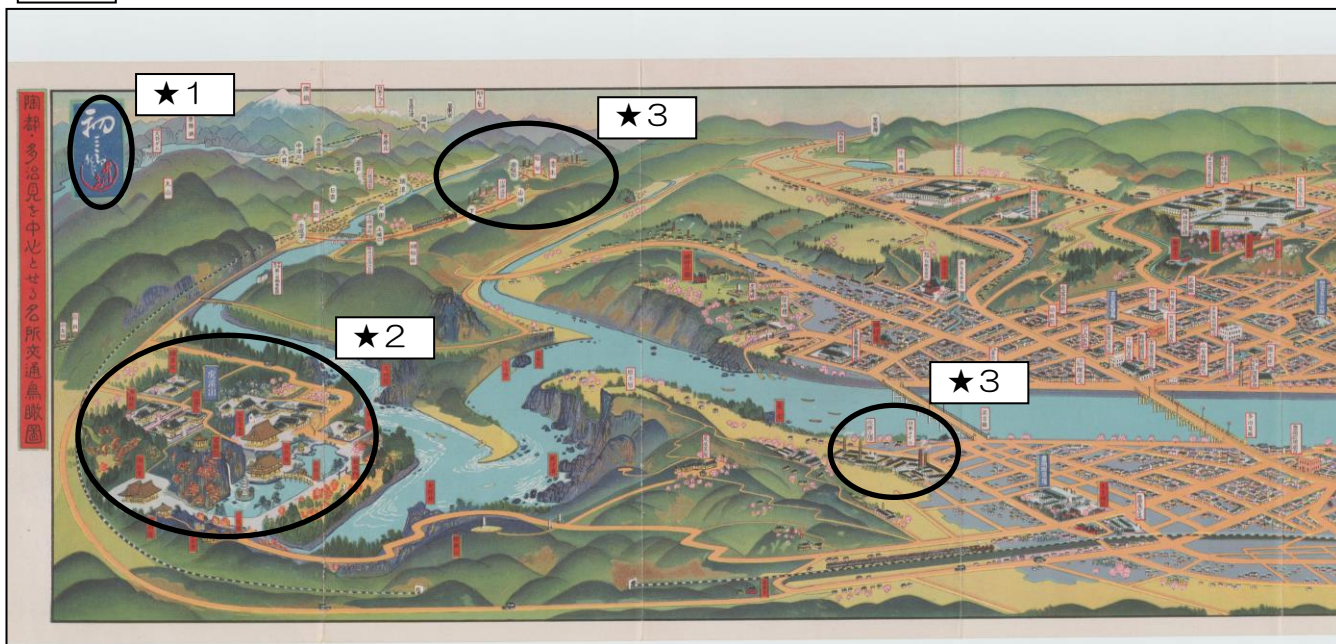
サイズ：16×74cm

作 者：吉田初三郎

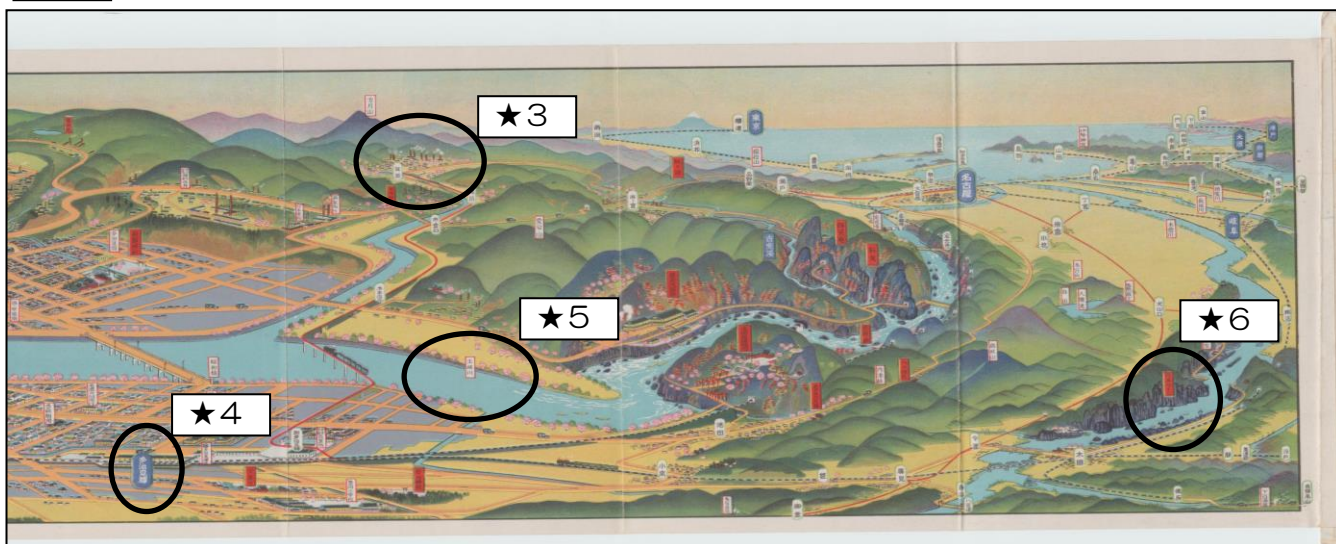
原図



左面



右面



【解説】

1929（昭和4）年、観光社関係者とともに多治見を訪れた初三郎は、「岐阜県には世界に誇るべきものが2つあり、1つは長良川の鶉飼、1つは日本製陶地の首班多治見」とし、名実ともに陶都であると述べている。地図中の多治見や笠原、下石、駄知などの製陶所の煙突からは煙が立ち上り、陶磁器産業が盛んであることがわかる。この図は、土岐川を挟んで広がる多治見の市街地を中心にし、左下の永保寺と古虎溪を名所の代表としてデフォルメしながらも詳細に描いている。国鉄中央本線や太多線、道路も丁寧に描かれ、昭和初期の多治見及び周辺地の交通事情や景観状況をうかがうことができる。

★1 吉田初三郎

1884（明治17）年3月4日京都市中京区に生まれた。初めは友禅図案の職工として奉公に出て、その後の1909年、洋画家の鹿子木孟郎に弟子入りした。西洋画を志すが果たせず、師匠に「まだ誰もやっていない商業画を目指したらどうか」と勧められて鳥瞰図に取り組み始めた。大正から昭和にかけての日本の観光ブームによって、初三郎の鳥瞰図の人気は高まり、大正名所図絵社を設立する。国内の交通行政を所轄し、観光事業にも強い影響力を持っていた鉄道省を筆頭に、鉄道会社やバス会社、船会社など各地の交通事業者、旅館やホテル、地方自治体、新聞社などが顧客であった。しかし、第二次世界大戦が進む中、初三郎式鳥瞰図は港湾等の軍事機密が見て取れ、「地政学上好ましくない」という軍部の判断のもと、不遇の時代を送った。戦後、初三郎が最初の大きな仕事として引き受けたのは、広島原爆の被害を鳥瞰図にする仕事であった。昭和天皇を敬愛し、日本を愛した初三郎は、渾身の図をまとめ、世を去ることになった。

★2 虎溪山永保寺

鎌倉時代に開創された小高い虎溪山に佇む禅寺。正式名称は臨済宗南禅寺派虎溪山永保寺。「虎溪」の名前の由来は、夢窓疎石がこの地を訪れた際、中国蘆山の虎溪の風景（現在は世界遺産）に似ていたことに由来すると言われている。国宝の観音堂と開山堂があり、庭園は国の名勝に指定されている。11月下旬には樹齢約700年の大銀杏をはじめとする紅葉が見事で、市民や観光客を魅了する。毎年3月15日には収蔵してある貴重な文化財や史料の一般公開が行われる。

★3 美濃焼

岐阜県多治見市、土岐市、瑞浪市、可児市など、東濃西部一帯で焼かれている陶磁器の総称。現在、全国の陶磁器生産の約20%を占める。

★4 多治見市

岐阜県南東部の多治見盆地を中心とした市。西は愛知県に接する。古くから陶磁器の生産がさかんで、桃山時代にはすぐれた陶磁器を生み出していた。現在は、国の伝統的工芸品に指定されている美濃焼や、全国でも有数の食器とタイルの産地になっていて、ファインセラミックスなどの先端技術産業も進出している。また名古屋市に近いことから宅地化が進み人口が急増した。

★5 土岐川

岐阜県恵那市を源流に、瑞浪、土岐、多治見市の盆地を経て愛知県春日井市から濃尾平野を流れ、名古屋市港区で伊勢湾に注ぐ一級河川。岐阜県では土岐川と呼ばれ、愛知県では庄内川と名前を変える。

★6 日本ライン

岐阜県南部、木曾川中流にある渓谷。木曾川と飛騨川の合流する地点から、下流の犬山市までの約13kmにあたり、飛騨木曾川国定公園を代表する観光名所の1つである。名前の由来は、ヨーロッパを流れるライン川の渓谷を連想させることによる。美濃加茂市の太田橋から舟に乗り、両岸に色とりどりの奇岩や絶壁がつづく激流を下り、景色を楽しむ日本ライン下りは有名である。終点の小高い山の上には、国宝の犬山城がある。

【活用の例】

○複数の製陶所があり、陶磁器産業が盛んであることがわかる。

→中学校地理的分野の「身近な地域の調査」や高等学校地理Aの「身近な地域の課題と地域調査」において、多治見市の伝統産業について調べる活動の中で活用できる。

○多治見市と名古屋市は土岐川（庄内川）沿いの鉄道でつながっていることがわかる。

→中学校地理的分野の「日本の諸地域（中部地方）」において、名古屋大都市圏の学習の中で活用できる。

○虎溪山永保寺が多治見市の名所として詳細に描かれていることがわかる。

→中学校歴史的分野の「中世の日本」又は「身近な地域の歴史を調べる活動」において、鎌倉時代の仏教についての学習や永保寺の歴史について調べる活動の中で活用できる。

【参考文献】世界大百科事典第2版、コトバンク、多治見の歴史文化